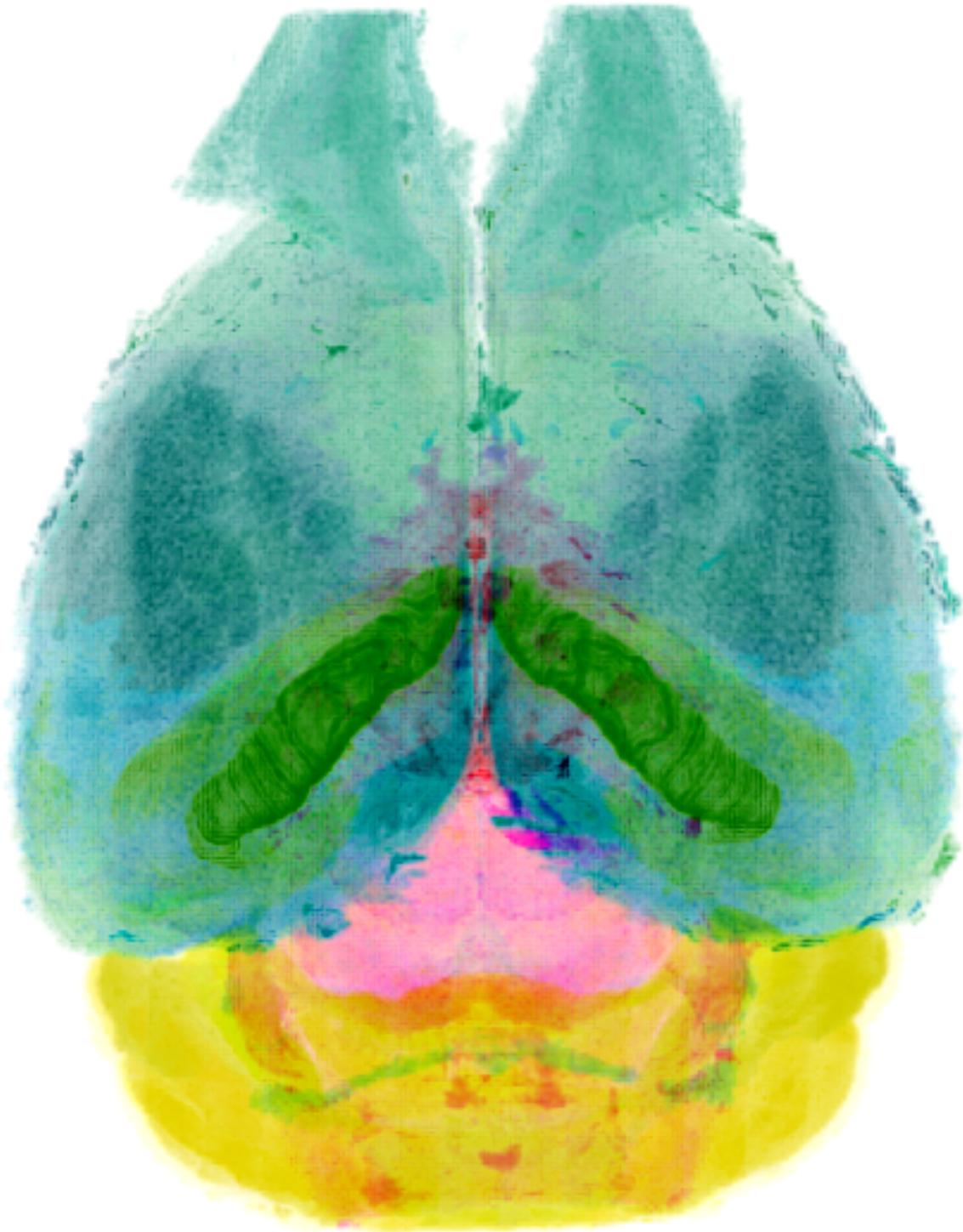


# 学内広報

2020.1.27

no.1530



もしかして、  
トロさん!?

→p11

ダイキンの海外拠点各所で行われた  
インターンシップの報告会で  
東大生が語った41の言葉

東京大学グローバル・インターンシップ・プログラム報告会より

# ダイキンの海外拠点各所で行われたインターンシップを経て東大生が語った41の言葉



中国内陸部の地方都市で**発展の大きさ**と**速さ**を実感した

日本と違い、中国では社会が今後**も拡大**すると**考え**られていた

シンガポールでは、暑いときはガンガンに冷房するのが普通で、**省エネ意識は高くない**と感じた

ポイントサービスが普及していないと気づき、ダイキン製品を使ったりするとポイントがたまる**Dポイント**というサービスを提案した

工場は他に移っても**巨大市場**は今後も中国にあり続けるとわかった

オフィスで寒さや暑さを言い出しにくい人のため、**スマホで要望を送り**温度を最適化する**空調**を提案した

日本人に好評の提案が現地スタッフには**不評**。**文化の違い**を捉えていなかった

圧力で中止しかけたダイキンの納涼祭が**地元警察**の力で実施され、**地域に根付**いていると感じた

人的管理の上では**専門性**の高いインド人と**汎用性**の高い日本人を組み合わせるのが**最善**だと思った

**一攫千金**を夢見る**若者**がひしめいていた

**現地の7企業**を訪ねて**人事担当者**に話を聞いた。  
観光旅行では到底できない**試み**だった

中国のダイキンは日本と違い**多角化**が**強み**だった

現地で**大きな刺激**を受け、**長期留学**を**決心**した

インド人社員はダイキン**製品を誇り**にしていた

ダイキンの工場でも**ストライキ**が盛んだった

コーヒーを入れる**使用人**、**運転手**、**社長**……

**職種間**で**微妙な人間関係**の違いを感じた

課題設定を求められず、**とにかく現場**を感じるといわれ、**懐の深さ**を感じた

語学、タイピング、発想……チームの仲間と長くすごしてみても**自分の足りない部分**を痛感させられた

会社や寮に設置し、飲みたい分だけ好きな銘柄を楽しむ

**シェアリング型****ワインセラー**を提案した

冷蔵技術とバイオセンサーやブロックチェーンを組み合わせた

**ベジベンダー**を提案した

最初は皆うわべのつきあいだったが、**中国**に来て壁にぶつかり、**メンバー同士**もぶつかった。

**腹を割って話す意義**がわかった

企業が**環境政策**に対する意見を発して**社会に影響**を及ぼす**重要性**を認識した



12月2日、令和元年度グローバル・インターンシップ・プログラム成果報告会が山上会館で行われました。150か国に広がるダイキン工業の海外拠点を学生が訪れ、ビジネスの最前線を体感するプログラムです。報告者は、地域滞在型と世界一周型の2種計13チームに分かれてこの夏の2～3週間に貴重な経験を積んできた約50名の学生。多くの関係者が見守る場で発せられた言葉を、誌面の許す限り紹介します。東大生は何を感じ、何を心得て帰ってきたのでしょうか。

13チームの報告内容 ※地色が下の言葉と連動

地域滞在型 中国チーム	巨大市場中国とその変貌のスピードを知る
地域滞在型 アジアチーム	シンガポールでの新ビジネスチャンス／10年後を見据えたブランド戦略／インドでの人的資源管理／タイの気候に応じた商品開発
世界一周型	空調の新しい製品サービス／人を基軸に置く経営とは
地域滞在型 米国チーム	IAQ データ分析に基づく提案／イノベーションの創り方／北米住宅用空調の新ビジネスモデル／化学事業の可能性を探る
地域滞在型 ヨーロッパチーム	低温技術とコールドチェーン／ヨーロッパの環境施策から考える

ロビーでのパネル展示に続いて行われた報告会では、参加した学生による司会のもと、全13チームの代表が順に登壇してプレゼンテーションを展開。中には映画調の自作動画を活用したり、討論スタイルを導入してカジュアルな空気感を演出する工夫を見せたチームもありました。

報告の後の講評では、まず五神総長が、互いを尊重し合う重要性が増す世界の中で、学生たちが自己相対化を実践してきたこと、世界の一員としての日本を実感したことが随所でわかって本望だという感想を述べました。また、この報告会はきっかけにすぎず、各地で見た様々な姿を今後もダイキンや社会に対して伝えていくことが支援への恩返しにつながるとの見解も示しました。

学生支援担当の松木理事は、グローバル人材を育成したいという当初の思いはある程度叶った、と総括。一方で、今日のプレゼン内容を各自が振り返り、いかに無駄な言葉が多かったかを認識するようにという冷静なアドバイスと、この経験を周りの友達に伝えてプログラムを広めて欲しいという要望表明もありました。

海外赴任歴27年という筋金入りグローバル人材であるダイキンの峯野専務からは「全員が無事に帰ってきた。東大生も丈夫やな」との第一声が。多くの日本企業が落ち込む中で伸びてきたダイキンも分岐点を迎えつつあるという認識を示すとともに、日本が縮小するだけの社会にならないようともに頑張ろう、と学生たちに呼びかけがなされました。

ダイキンの米田執行役員からは、与えられた課題を解くのは得意だが課題を設定するのは苦手だという先入観が吹き飛ばされ、東大生は才能の塊だと思った、とのお言葉をいただきました。人材交流そのものがダイキン流イノベーションに一番のきっかけとなるという理解のもと、次年度以降もプログラムを拡大して続けていく決意が表明されました。

当日は学生たちでほぼ満席に。山上会館の新しい空調システムに若者の熱気と軽さが相まって、会場の「IAQ」も悪くなかった模様です。



初エアコンを買う若者は価格を重視し、寝室に設えていた。環境への配慮も若者の購入要因だ。若い世代用の寝室専用エアコンを開発すべし。最初のエアコンのメーカーを、その後も選ぶ傾向があった。

今後のエアコンでは室外も対象になるはずだ。10年後を見据えるとコンセプトは「農業×ダイキン」だ。ダイキンの流通網は作物の流通にも使えるかもしれない。

多くの時間を室内で過ごす人間にとって、室内空気質 (IAQ) は非常に重要だ。IAQを価値にする場として、病院やレストランが有力候補になる。

ダイキンは大企業なのにベンチャー企業のように感じた。ダイキンで働いている人々を見て初めて働くのは楽しいかも、と思えた。化学事業の現場を見てみて、大学の実験と企業の実践との違いを感じた。

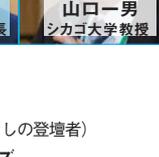
ベルギーのダイキンの現地駐在員は仕事を心底楽しんでた。赴いた場所を好きになるのがグローバル人材だと思った。

日本人のアイデンティティを持つグローバル人材になろうと思った。世界には日本製品がたくさんあった。高くても信頼があって選ばれていることに誇りを持ちたい。うまいものたくさん食べたが帰国して大阪で食べた串カツが一番うまかった。

日本メーカーは商品だけでなく陳列にも手を抜いていなかった。ダイキンはイギリス政府と組んで実証実験を進め、ヒートポンプ暖房を広めていた。環境意識UPを訴えるTシャツを皆で揃えた。

東京大学とCIASの協創による新たな国際会議がスタート

# 東京フォーラム2019 ほぼ全登壇者アルバム

 五神真 東京大学総長	 チェ・テウオン 韓国SKグループ会長 CIAS理事長	 亀岡偉民 文部科学省副大臣	 イ・ホング 元韓国首相	 隈研吾 建築家、東京大学教授	 レベカ・グリンズパン Secretaria General Iberoamericana 事務局長	 エンリコ・レッタ バリ政治学院 国際関係学部長	 ヘレン・クラーク 元ニュージーランド首相
 パク・イングク CIAS事務総長	 エドウィン・フルナー アメリカ ヘリテージ 財団創設者	 ジョン・ヘイムリ アメリカ CSIS 所長	 隈研吾 中曽根平和研究所 理事長、元駐米大使	 ユン・ヨングワン 元韓国外相	 張蘊頌 中国社会科学院	 小倉和夫 元駐韓・駐仏大使	 キム・ユン 韓日経済協会会長
 ロバート・アトキンソン アメリカ情報技術イノ ベーション財団総裁	 ビクター・チャ CSIS	 パク・チョルヒ ソウル大学教授	 朱鋒 南京大学教授	 ジョセフ・ユン 元アメリカ 北朝鮮 担当 特別代表	 キム・ビョンヨン ソウル大学教授	 味楚俊 東京大学教授	 佐藤仁 東京大学教授
 ダニエル・アッシュド オックスフォード大学	 エレーン・ガバンダー ケープタウン大学講師	 菊池康紀 東京大学准教授	 フラジダ・チャイヤバ チェンマイ大学講師	 リ・ワンヒ ソウル国立大学	 ドリエリ・ベイエル サンパウロ大学研究員	 沖大幹 国連大学教授	 ジョン・テヨン 延世大学教授
 リ・ジェソン 高麗大学教授	 雷少華 北京大学助教	 カンテイ・パジバイ シンガポール国立大学教授	 ピーター・トルボウツ ロンドン大学スクール オブエコノミクス教授	 張清敏 北京大学教授	 ジョン・アイケンベリー プリンストン大学教授	 鄭雄一 東京大学教授	 チャオ・ヘンタイ 輔仁カトリック大学 病院 理事(台湾)
 エラントレド サナラベンチャーCTO	 野崎慎仁郎 WHO西太平洋事務局	 光石衛 東京大学 大学執行役・ 副学長	 藤本隆宏 東京大学教授	 松尾豊 東京大学教授	 染谷隆夫 東京大学教授	 暦本純一 東京大学教授	 フリッツ・クロッケ フランクフルター研究所 教授(ドイツ)
 ラッセル・テイラー ジョンズ・ホプキンス 大学教授(米国)	 ピエール・ジャン レンヌ大学教授(フランス)	 森健策 名古屋大学教授	 原田香奈子 東京大学准教授	 江間有沙 東京大学特任講師	 大橋弘 東京大学教授	 米村滋人 東京大学教授	 ジアン・チャオ ノースウェスタン大学教授
 アリンダ・アイゼンバーグ プリンストン大学教授	 アネット・キム 南カリフォルニア大学 准教授	 マーシャル・ブラウン プリンストン大学准教授	 横張真 東京大学教授	 エリック・アビラ カリフォルニア大学 ロサンゼルス校教授	 日下部真彦 東京大学助教	 シルビア・エレナ・ジョグ メキシコ大学学長	 ダイアン・ハリス アントリュー・メロン財団 シニアプログラムオフィサー
 オリット・ハルバーン コンコディア大学 准教授	 シェルドン・ガロン プリンストン大学教授	 ブルーノ・カルヴァルホ ハーバード大学・ロマンス 言語文学研究所教授	 今泉柔剛 日本スポーツ振興セン ター理事	 白波瀬佐和子 東京大学理事、副学長	 山口一男 シカゴ大学教授	 松井彰彦 東京大学教授	 神林龍 一橋大学教授
 リ・コンホ ENUMA共同創設者、 チーフエンジニア	 ソン・ジェ 元アリアンTV&Radio CEO	 相原博昭 東京大学大学執行役・ 副学長	 羽田正 東京大学大学執行役・ 副学長	 テイラー・レイノルズ MITインターネット ポリシー研究所博士	 ニコラス・イリオポロス 東京大学		

12月6～8日に開催された東京フォーラムは、ビジネス、テクノロジーから政治まで、幅広い分野における世界的な議論の場となることを目指す試みです。今回のテーマは「Shaping the Future」。主催は東京大学と韓国の学術振興財団 CIAS(Chey Institute for Advanced Studies)。日韓の政治的確執が続く中で関係をよりポジティブな方向に変えたいという、両国の学術界と実業界の希望を象徴するものです。3日間で開催者数が121にも及んだ大規模イベントの顔触れからその意義をご確認ください。

フォーラムは、本学の五神真総長、CIASのチェ・テウォン理事長、文部科学省の亀岡偉民副大臣、そしてイ・ホング元韓国首相という日韓4名の開会挨拶で始まりました。

1日目には、隈研吾教授、レベカ・グリンズパン氏、野依良治氏が基調講演を行い、2つの特別対談を行いました。エンリコ・レッタ氏とヘレン・クラーク氏という首相経験者2人の対談では、ポピュリズムが台頭する現代、「ミドルパワー」(超大国ではないが国際的影響力を持つ中堅国)の重要度が増しているとの認識が示されました。アジアで最もパワフルな実業家である孫正義氏とジャック・マー氏の対談では、一千億ドル規模の投資ファンドを通じてスタートアップの支援を続けると孫氏が意欲を語り、「子どもたちが創造的・建設的・革新的になれるように教育の方法を変えねばならない」とマー氏が変革の時代に備えた教育の充実を訴えました。

続いて3つのパネルディスカッションが行われました。日韓実業界のリーダーによるセッションでは、韓日経済協会会長のキム・ユン氏による二国間関係回復のための提案に、経団連会長の中西宏明氏が、産業化によって生じる社会的課題の解決という困難なプロセスを経験した両国が、アジア諸国での同様の課題の解決を支援すべきだと応じました。北東アジアの地政学的転換に関するセッションでは、ヘリテージ財団創設者のエドウィン・フルナー氏が、米中の貿易摩擦が解決しない理由として、知的財産権についての不一致と中国に対する世銀の低金利融資を挙げました。張蘊嶺中国社会科学院教授は、中国は国際的パートナーと共に平和と発展という戦略を取る必要があるとの認識を示しました。

2日目には、アカデミアを代表する研究者6人が各々オーガナイザーを務めるパラレルセッションを開催。6つのテーマ(左参照)について、計91人の登壇者と議論を繰り広げました。

3日目には、3つの特別講演がありました。林毅夫氏は、発展途上国が近代的産業国家に変わるのに必要なインフラの構築に「一帯一路」が役立つと述べました。スプツニ子氏は、未来の課題と機会の両方を考えさせるスペキュラティブ・デザインについて説明しました。リコンホ氏は、教育の機会を奪われた子どものためのアプリを使って成功したプロジェクトについて述べました。その後、2日目に行った6つのパラレルセッションの報告会と、閉会式、懇親会を行い、全日程を終了しました。

一般常識では答が出ない複雑な状況に直面する今、どのように未来を形作るべきか。議論を喚起すべく、東京大学とCIASは、東京フォーラムを毎年開催することで合意しました。



パラレルセッション(2日目)の6テーマ 人名はオーガナイザー名	① 味埜	サステイナビリティに向けたトランスローカルアプローチ	④ 光石	デジタル革命
	② 藤原	非グローバル化時代における人類全体の安全保障の追求	⑤ アイゼンバーク	都市の未来
	③ 鄭	生涯元気で：自分で守る健康社会	⑥ 白波瀬	地球時代の不平等：インクルーシブな未来を求めて

教養教育の現場から

第37回

## リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

## 「戦争」と「投稿」を切り口に雑誌研究の世界へ

／全学自由研究ゼミナール「文学と雑誌—日本近代小説と雑誌を中心とする活字メディアの関係を探る」

——前職も駒場だそうですね。

「総合文化研究科言語情報科学専攻の助教時代に初年次ゼミナールの授業を行ったのが一つの契機となり、4月に初年次教育部門に着任しました。初年次ゼミの文系科目の運営を行いながら自分の授業を受け持っており、その一つが「文学と雑誌」です。私は専門がフランス文学で、オノレ・ド・バルザックの作品を初出掲載時のコンテクストと関連づけて読む研究を進めてきました。実はバルザックは自身も印刷業を経験しており、出版やメディア抜きには語れない作家なんです」

日本の近代雑誌史を文献で学ぶ

——フランス文学の授業なんですか。

「いえ。日本文学の作品が雑誌に掲載される経緯とその後を調べて発表する授業を前学期に実施し、今回はその延長で、雑誌自体に着目する授業を企画しました。専門領域の研究の初歩を学ぶという初年次教育全体の志に沿っています。駒場図書館や日本近代文学館にある一次資料に触れる経験をしてもらう意図もありました」  
「まず近代の雑誌史を学ぶため、明治新聞雑誌文庫や駒場図書館で活躍された永嶺重敏先生による雑誌研究の基本書<sup>※</sup>を

精読しました。軍人の肖像写真や海戦場面の版画などで人気だった戦争実記という枠組みを転用して誕生した『太陽』を中心に、雑誌の出自と掲載作の主題の重なりを学生に知ってもらいました」

——『太陽』は戦争賛美の雑誌ですか。

「戦争関連作が多いですが、泉鏡花の『海城発電』のように、国際的な視点から戦時下の複雑な問題を批判的に捉えた創作もある。賛美側と批判側の両者を取り込もうという商魂が見えました。ただ、雑誌の覇権は『太陽』から『中央公論』、婦人雑誌、『キング』と移ってより大衆的になり、文学色は薄れていきます」

「二流」の投稿雑誌『若草』とは？

「そこで次に参照したのが1925年刊の『若草』です。主に女性読者が文学的に綴った文章を送って男性作家が選評する投稿雑誌としてスタートしました。そこにジェンダーの構造や雑誌が示そうとした女性像が見えるという慶應義塾大学の小平麻衣子先生の編著<sup>※</sup>による分析を、学生が日本近代文学館で入手してきた当時の誌面と照らし合わせながら確認しました」

——執筆陣にはどんな作家が？

「片岡鉄平、南部修太郎など、現代人は

お話／初年次教育  
部門 准教授  
谷本道昭



ほぼ知らない、忘却された作家たちです。たとえば南部は、女性は感傷的な生き物で、書き方も読み方も感傷に引きずられがちだと誌面で説教しています。一方、北川千代という女性作家は、あくまで感傷的な主題にこだわった創作をしている。女性の感性をどう文学に昇華するかというテーマが議論されていた気がします」  
「そうした学びを経て各自がテーマを決め、最終報告を行います。実際の雑誌研究ではなく実現可能性のある研究計画の発表です。「日本における文化と社会運動の区別について」、「雑誌『女人芸術』と尾崎翠」、「少女といふ花園」、「戦旗」の投書欄に見る『戦旗』と民衆の関わり」といった題目が提出されています」  
「かつては雑誌こそが文学の一番の現場でした。昔の雑誌のデジタル化が進む現代では、従来と違う新しい読み方も可能になるでしょう。来年度も活字メディアを扱う授業は続けたいと思っています。文学雑誌だけでなく科学雑誌など他分野の雑誌も取り上げられるといいですね」



①『太陽』創刊号（1895年）の表紙。SUNの逆版になっているものもありました。②授業で用いた『若草』の誌面コピー。後には投稿員が減って普通の文芸誌に変貌し、川端康成や井伏鱒二や太宰治なども寄稿するように。



③④学生たちによるプレゼン資料より。『ひまわり』『戦旗』『女人芸術』『改造』など、時代の空気を反映した様々な雑誌が研究対象に選ばれていました。



※『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部／1997年）※『文芸雑誌『若草』』（翰林書房／2018年）

# 部局長だより

第5回

～UTokyo 3.0 を導くリーダーたちの横顔～



教育学部・薬学部編

## 渋谷区と「子ラボ保育園」を始めます

70周年を迎えた教育学部は、理三を除く全科類から多くの学生を迎え入れ、学生も教員も女性比率が全学で一番高い部局です。乳幼児、高齢者、障害のある方など、幅広い層を対象とする研究活動も特徴。東大でダイバーシティといえ



教育学研究科長・教育学部長  
秋田喜代美 趣味:絵本

ば本学部だといえるでしょう。今年度、教育研究創発機構の下に海洋教育研究センターを加えました。環境保全教育の重要性の高まりに即し、海洋アライアンスの教育機能を移した形です。学部教育では、新しい価値を生む創造性につながる芸術系の授業を学部共通科目として整備。研究科では、9月に国際卓越大学院(WINGS-CER)を開始し、提携大学との国際交流等を進めています。来春には、多様性を重視する渋谷区とのコラボで区立保育園に研究室を新設します。通称「子ラボ保育園」。各種センサーやICT機材を設けて保育園自体を研究し、街づくりの拠点としても機能する場です。学術研究のための保育園は本邦初でしょうね。社会のあらゆる場面につながるのが教育です。基礎研究と実践を往還しながら教育的なマインドを持って行動する学生を育成していきます。

振り返れば、戦後の公教育の砦となってきた本学部ですが、昨今の教育のビジネス化は危惧すべき事態です。東大の教育のプレゼンスを上げ、公教育の価値を堅持したいと思います。

## Human Healthという究極の目標へ

薬学部は、ヒトの体に直接作用する「薬」を扱うのに必要な「物質の科学」と、疾患メカニズムを解明する「生物の科学」の融合による、新しい学問領域の開拓と応用を目指しています。最大の特徴は、基礎研究を重視しながらHuman Healthという究極の目標に向かっていることです。



薬学系研究科長・薬学部長  
一條秀憲 趣味:ソロキャン

連携する「創薬機構」では本格的な創薬研究も進行しています。生命科学というぶれない軸を保ちつつ育成人材は多様性に富み、アカデミアはもとより、製薬企業や医療行政機関等に有能な人材を輩出。6年制の薬学科では社会の要請に応える先導的薬剤師を養成しています。施設面では、使用頻度が減少したラジオアイソトープ施設を廃し、レンタルスペースに転換。さらに、本年3月の竣工を目指して新講堂を建設中です。

近年、組織的に進めてきたのは、リソースを無駄なく効率的に使うための機器共用化です。文科省の支援を得て6年前に「ワンストップ創薬共用ファシリティセンター」を設置し、質量分析器や共焦点顕微鏡などの先端機器を、他の研究室はもちろん、他研究科や学外の研究者も使えるように整備しました。専任のセンター員が保守を担い、機器の無駄な重複をなくし、課金制度と使用ルールを徹底することで、学内で最も成功した共用施設の一つに育ちつつあると自負しています。

## シリーズ 第23回 連携研究機構



インクルーシブ工学  
連携研究機構

の巻 話/機構長  
川原圭博 先生

## 技術の恩恵を皆が享受する社会へ

——インクルーシブ工学。……初めて聞きました。

「工学にはデバイス、環境技術、機械、電気……と幅広い分野があります。AIや情報を接着材として各分野の技術を束ね、包摂的な社会を実現したいという大久保達也工学系研究科長の思いを具体化するため、機構長の任に就きました。現代では資本主義が技術を駆動する面があります。企業は儲けのために技術を磨き、金を出すだけが技術を享受できる。でも、技術は本来、皆のもので。社会の様々な格差を縮めるために工学の技術を活用するのがインクルーシブ工学です」

——情報×工学でSDGsを実現するわけですね。

「その一手として設置したのが、メルカリの研究部門R4Dと組んだ価値交換工学連携研究部門です。他の人にとって有用となる不用品は数多く、フリマアプリは価値交換の場として人気ですが、多くの方は、自分の値付けや、届く商品の状態などに不安を感じることも少なくないと思います。でも、AIを使えば価値交換はより上質なものになるはず。メルカリだけでなく、現代では様々な価値交換がスマホなどで行われています。未来の価値交換の姿を5年かけて探ります」

——メルカリと提携したきっかけは何でしたか。

「創業者で社長の山田進太郎さんが学生時代の友人で、無線給電のオフィスや、空気を抜くと鞆に入る乗り物(poimo)などの共同研究を行ってきた縁があります。ただ、価値交換工学だけではありません。未来社会の様々な姿を想定し、それに対応する研究部門を増やす予定です。たとえば、服のサイズはS-M-Lが普通ですが、スマホで体型を撮り、画像処理とCGモデリングと編み機制御の技術を合わせれば、規格外の人にも最適な服を作れる。衣・食・住を見据えながら、ゲームチェンジングな企業とインクルーシブ工学を進めます」

「2月には安田講堂でキックオフシンポジウムを行い、工学系の染谷隆夫先生、先端研の稲見昌彦先生ほかの運営委員が登壇予定です。総長や、企業、自治体の幹部にもお声がけしました。poimoについても都のような自治体と組んで実証実験をしたいですね。起業精神が強い学生にフィールドを提供するのも機構の役割です。自分の技術で社会を変えたい研究者は誰でも歓迎。ビジョン策定や企業への営業の支援もしますよ」

——ロゴは青と黄の針金でしょうか。

「6部局を束ねて包摂的な社会を目指すことから、六角形をリボンで包む姿です。形は複数あり、ホームページを読み込むたびに違う形が表示される予定です。お楽しみに」



RIISE

www.riise.u-tokyo.ac.jp

## ワタシのオシゴト 第164回

## RELAY COLUMN

工学系・情報理工学系等事務部  
国際推進課上席係長

高野 稔

## 工学部8号館117号室から



いつもの座席から

工学系研究科には、バイリンガルキャンパスの構築と国際化教育、工学教育の基盤強化等を推進するための附属施設として国際工学教育推進機構が設置され、同機構に置かれた国際事業推進センターに事務の国際推進課が位置付けられるなど、ユニークな組織が構成されています。

私は現在その国際推進課で勤務しており、主にJICA（独立行政法人国際協力機構）との契約で受入れた研修員（留学生で現在20名が在籍）の支援、留学生経費配分及び国際工学人材育成基金（昨年渉外部門の方々に多大なご協力をいただきました）関係の業務などを受け持っております。

研修員関係では、指導教員の方々、研究室や専攻の留学生担当、財務課及び学務課の方々からのご協力を頂きながら経費精算の資料等を作成し、また留学生支援チームと連携して関係の方々への情報発信、JICAのご担当の方との連絡調整や奨学金支給業務等を進めています。担当者として、研修員の方々が本研究科での修学を経て、今後様々な研究分野でご活躍されることを願っております。

最後の1  
レップが  
重要

得意ワザ：強いといえばベンチプレス

自分の性格：まじめ

次回執筆者のご指名：坪山彰子様

次回執筆者との関係：同じ留学生支援業務担当です

次回執筆者の紹介：とても仕事熱心な方です

## 東大アラムナイ通信

卒業生と大学をつなげるプラットフォーム

第5回

社会連携本部卒業生部門  
特任専門職員

梶野久美子

## 思いを形にする、貢献を実現する

以前本コラムでお伝えした「東大校友会サポーター制度」は、後輩たちに自身のスキルや経験を還元したいと考える卒業生のボランティア制度ですが、彼ら以外にも大学に貢献している卒業生や在学生在がたくさんいます。

2010年から始まった「海外大学院留学説明会」のメンバーもそうです。当時、本学から海外に留学する学生が増えないのは、海外留学の情報が少ないことが大きな理由であると考えた卒業生が、自分たちの留学経験談を学生に伝えようと企画・開催してきました。彼らは海外大学院留学を進めるのではなく、後輩達がキャリアや人生を考える上で、ひとつの選択肢として海外大学院進学に関する情報提供を目指しました。

参加した学生から好評だったため、以後、毎年夏と冬の2回開催し、10年が経過した今では、説明会に参加して留学を決めたという学生が増えつつある一方、過去の参加者が留学を経験し、説明会の講演者やパネリストとなる好循環も生まれています。

このような活動は、海外における本学の評価向上や学生の人材育成にもつながると言えます。

また、夏に開催した「高校生のためのオープンキャンパス」で、一役買ってくれたのは教養前期課程から大学院生までの学生たちです。未来の東大生に向けて「センパイに聞いてみよう」という質問コーナーを設けました。東大に興味のある高校生を相手に、受験当時の参考書を持参して勉強法を語った学生、進路選択から現在の研究に至った事を話す学生など、高校生と受験時代の自分の姿を重ね合わせ、熱心に対応していました。オープンキャンパスに訪れた高校生にとっても、頼もしい先輩として記憶に残ったのではないのでしょうか。

私たちは卒業生と在在学生とのつながりを、大切にしたいと考えています。大学への貢献のバトンが未来につながるよう、今後も様々な視点で取り組んでいきます。

オープンキャン  
パスで設けられ  
た校友会の質問  
コーナー東大アラムナイ [www.u-tokyo.ac.jp/ja/alumni/](http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/alumni/)

## デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

第8回

教育学研究科・教育学部  
図書チーム 係長

白石 慈

## 「デジタル富士川」の可能性

教育学研究科・教育学部図書室が所蔵する「富士川文庫」は、医学博士・文学博士の富士川游（1865～1940）の旧蔵書のうち、江戸後期～明治期の教科書や教育関係資料です。『日本医学史』などの著作がある富士川博士は和漢の医学書や西洋医学書を蒐集し、現在では大変貴重な資料となっています。蔵書の医学書類の多くは、京都大学図書館機構や慶應義塾大学メディアセンターに所蔵されています。

当室の資料には初等教育の教科書である「往来物」のほか物語や教訓、絵本などが含まれ、当時の社会や文化を研究する上で重要な資料です。1998～1999年度に172件の電子化を行い、東京大学附属図書館「電子版貴重書コレクション」で公開してきましたが、2018年に東京大学デジタルアーカイブズ構築事業の一環としてIIIFで再公開しました。

資料の中には葛飾北斎が挿絵を描いた『繪本庭訓往来』などもあります。美術館等の展示ではケース越しにしか見られない資料を、デジタルでは自宅や研究室で好きな時に好きなページを好きなだけ、気になるところは拡大して見られます。



「繪本庭訓往来」

どうです、ちょっとわくわくしませんか？

先に「富士川文庫」は京都大学や慶應義塾大学にも所蔵があると書きました。両大学は2018年9月28日に「富士川文庫デジタル連携プロジェクト」の試行サイトを公開しました ([http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/rdl/digital\\_fujikawa/](http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/rdl/digital_fujikawa/))。

このプロジェクトは複数大学が所蔵する「富士川文庫」を一堂に公開し、日本医学史の研究・発展に寄与

することを目的としています。また分散コレクション仮想統合の一例を提示する役割も果たしています。当室は2019年2月にプロジェクトに参加し、3大学の合計公開資料件数は2019年4月現在5,665件となっています。現在は、慶義塾大学所蔵分がデジタル化され順次公開されています。まとまったコレクション資料が広く公開されることで、今後新しい発見やこれまでとは違った方向の研究が生まれるかもしれません (<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/fujikawa/>)。



「富士川文庫デジタル連携プロジェクト試行版」サイト

専門知と地域をつなぐ架け橋に

## FSレポート!

第4回

文科一類2年 相田健志  
経済学部4年 前川拓実

## 地に足の着いた政策を

私たち山形県鶴岡市担当はこれまで合計3回の現地調査を行ってきました。簡単に担当地域の説明をする、現在の鶴岡市は平成の大合併の際に誕生した「新」鶴岡市で、そのうちの旧櫛引町の範囲にあたる櫛引地域を中心に活動しています。櫛引地域は海側を山に遮られていることから古くから果物栽培が盛んで、現在も一つ一つの種類は少量ながらも多品種の果物が通年を通して栽培されており、さくらんぼ狩りやぶどう狩りなども楽しめるなど美味しい魅力で溢れる地域です。



櫛引の美味しいもぎたてぶどうをいただくチーム

近年、鶴岡市は世界一のクラゲ水族館として知られる加茂水族館や、日本遺産にも登録されている修験道の聖地出羽三山を始めとして観光面で国内外から注目を集めています。櫛引地域も「フルーツランド」を核とした観光政策を中心とする地域振興策を検討しており、私たちはその策定のお手伝いをさせていただいています。インバウンド観光客の増加などによって日本国内の観光業の活況が叫ばれて久しくなりますが、それらは古くからの観光地が中心であり、新規参入は難しいのが現状です。そこで、私たちは櫛引地域の魅力



加茂水族館の美しいクラゲ水槽

度向上のみならず、鶴岡市内や庄内地方、他の東北各県の観光における面的広がりを意識した調査を行って来ました。

現在は調査自体は全て終了し、具体的な政策提言の内容について検討していますが、大事にしていることが一つあります。それは「地に足の着いた政策にしよう」という事です。一見当たり前の様に思える事ですが、全国各地で行われている地域振興策を見ると一番大事なこの部分が満たされていない事が多いのです。地域にとって最適な未来像を描いていくと同時に、一歩一歩そこに向かってクリアしていくステップをしっかりと設定していく。地域の人々の生活の延長線上に確かに存在する政策提言を最後まで私たちは考えていきたいと思えます。

フィールドスタディ型政策協働プログラム  
[www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/special-activities/h002.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/special-activities/h002.html)

**トピックス** 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル (一部省略している場合があります)
12月6日	産学協創推進本部	東京大学とソフトバンクグループによる「産学協創協定」の締結について
12月9日	本部奨学厚生課	「高等教育の修学支援新制度」の実施後における本学の方針について
12月10日	産学協創推進本部	東京大学・ソフトバンクグループによる共同記者会見
12月10・18日	総合文化研究科・教養学部	加藤英明准教授が「ナイスステップな研究者 2019」と「第12回井上リサーチアワード」を受賞
12月13日	医科学研究所	新しいゲノム編集ツール CRISPR-Cas3 の開発に成功
12月13日	生産技術研究所	生産技術研究所の企画展示がサイエンスアゴラ 2019 に登場
12月16日	大学総合教育研究センター	UTokyo English Academia「英語で専門科目を教えること」新規コース開講!
12月16日	理学系研究科・理学部	大越慎一教授(化学専攻)がフンボルト賞を受賞
12月16日	本部広報課	令和元年度退職教員の最終講義 1月開催分のお知らせ
12月17日	大気海洋研究所	日本海の渦内部に爆弾低気圧の痕跡を発見 渦内で生き残る爆弾低気圧のエネルギー
12月18日	医学系研究科・医学部	WINGS-LST/GPLLI Joint Colloquium 2019 開催報告 医工薬理の大学院学生が知を結集
12月18日	総合文化研究科・教養学部	長田有登特任助教が日本物理学会若手奨励賞と「井上研究奨励賞」を受賞
12月18日	本部学生相談支援課	2020年度大学卒業・修了予定者(2021年3月卒業・修了予定者)の就職・採用活動について
12月19日	薬学系研究科・薬学部	井上將行教授が第36回井上學術賞を受賞
12月10～1月7日	本部広報課	IT技術と現地密着の活動で途上国の隅々にまで医療を   酒匂真理さん、AIを駆使した画像解析技術でライフサイエンスの現場を支援   島原佑基さん、医師でもあるCGクリエイターが伝える正しく楽しいサイエンス   瀬尾拓史さん、「細胞ファイバ」の技術をタピオカのように身近に   安達亜希さん / 「淡青」39号「UTokyo 30s」より
12月19日	広報戦略本部、本部国際戦略課	東京フォーラム2019を開催 世界の有識者が一堂に会し、人類の課題解決への道筋を議論
12月20日	本部社会連携推進課	東京大学・IBM共同記者発表会
12月23日	本部学生相談支援課	「東京大学知の創造的摩擦プロジェクト」～第29回交流会開催報告～
12月23日	カブリ数物連携宇宙研究機構	第4回「やっぱり物理が好き!～物理に進んだ女子学生・院生のキャリア～」を開催
12月23日	医学系研究科・医学部	経営のできる大学病院幹部養成プログラム 2020年度標準コース履修生募集
12月25日	農学生命科学研究科・農学部、グローバルキャンパス推進本部	UTokyo-NTU Joint Conference 2019が開催されました
12月25日	本部広報課	新しい渋谷から未来への問いかけを / 総長室だより第25回
12月25日	広報戦略本部、総合文化研究科・教養学部	「国連」の不正を正す 平和活動要員による性的な搾取や虐待に対するアカウンタビリティの研究
12月26日	本部人事企画課	「令和元年度東京大学卓越研究員」22名決定
12月26日	教育学研究科・教育学部	令和元年度教職課程・学芸員等実習報告会及び懇談会を開催
1月1日	本部広報課	2020年 五神総長年頭挨拶



## CLOSE UP

### 生命科学技術国際卓越大学院のコロキウムを開催 (医学系研究科・医学部)



コロキウムの司会進行、一連の講演は原則英語で行われました  
<http://square.umin.ac.jp/wings-lf/>

生命科学技術国際卓越大学院(WINGS-LST)のコロキウムを10月26日～27日に神奈川県大磯町の大磯プリンスホテルで開催しました。WINGS-LSTは医・工・薬・理の各研究科から選抜された学生が約150名所属するプログラム。学生が企画・運営するコロキウムでは、アステラス製薬研究本部の木村博道氏、ミラバイオロジクス株式会社社長で前TR機構特任教授の加藤益弘氏、シンガポール国立大学医学部教授の伊藤嘉明氏の3氏による講演を通して、普段の研究と異なる視点で国際的、学術的課題を学び、

キャリアパスを考える絶好の機会となりました。また、異分野の学生が交流し、将来の融合研究の可能性を見出すため、「Be a challenger -Challenge and Disseminate-」がテーマのグループワークも実施。4～5人を1組とした26チームが、生命科学分野における「未解決」課題についてアイデアを出し合い、どんな技術で解決を図れるかを議論し、背景から解決策までをホワイトボードにまとめて発表しました。参加者たちが活発に議論を行い、研究科を超えたネットワークを形成する機会になりました。

 CLOSE UP

**物理が好きな女性のためのイベントを開催** (カブリ数物連携宇宙研究機構ほか)



17名の参加者と、講師・スタッフ

11月30日、カブリ数物連携宇宙研究機構 (Kavli IPMU) と物性研究所、宇宙線研究所の主催により、「やっぱり物理が好き! ~物理に進んだ女子学生・院生のキャリア~」をKavli IPMU棟で開催しました。物理学出身の様々な講師を招いてキャリアパスを提示し、参加者同士のネットワーク作りや物理学分野の魅力を伝える機会として行われたもので、今年が第4回目となります。森初果物性研究所所長の挨拶の後、キオクシアホールディングス株式会社で広報・企画業務を行う徳永千恵子さんが「人生100年時代のキャリア形成を考える」と題して講演。次に筑波大学システム情報系社会工学域

助教の佐野幸恵さんが「すべてはつながりから始まる」と題して講演。続いて名古屋大学素粒子宇宙起源研究所広報の南崎梓さんが「好き! で選んだ私の道」と題して講演。最後に千葉大学グローバルプロミネント研究基幹教授の石原安野さんが「ニュートリノで宇宙を探る日々、そこに至るまでの道」と題して講演しました。講演の合間には、参加者が3班に分かれてそれぞれ研究機関を回る施設見学を行いました。交流会では、お茶やお菓子を片手に講師へ積極的に質問する姿や参加者同士の交流がみられました。最後に徳永将史物性研究所准教授が挨拶してイベントを締めくくりました。

 CLOSE UP

**「Beyond AI 研究所」の開設に向けた協定を締結** (産学協創推進本部)



左から宮川 代表取締役 副社長執行役員兼CTO、孫 代表、五神 総長、藤井 理事・副学長

東京大学とソフトバンク株式会社は、「Beyond AI 研究所」の開設、および研究成果の事業化に向けた取り組みに関する協定を締結し、12月6日に工学部2号館で共同記者会見を実施しました。「Beyond AI 研究所」は、東京大学と海外の有力大学の世界最高レベルの研究者を擁した最先端のAI研究機関になることを目的として設立します。この研究所では、AIの基盤技術研究やその他の学術領域との融合を目指す基礎研究領域と、さまざまな社会課題・産業課題へのAIの活用を目的とする応用研究領域の二つの領域で研究を行います。基礎研究領域

の研究所を本郷キャンパスに、応用研究領域の研究所をソフトバンクが2020年度に本社を移転する竹芝の新オフィスに設置します。研究所内では各研究領域の連携を密に行うとともに、研究成果の事業化にあたっては、大学と企業とのジョイントベンチャーの迅速な設立を可能にするビークルとしての技術研究組合活用促進のために経済産業省が呼称を変更し運用改善を施したCIP制度(Collaborative InnovationPartnership)を積極的に活用します。「Beyond AI 研究所」を通して、日本のAI研究およびAIビジネスの発展に貢献し、日本のAI革命をけん引します。

 CLOSE UP

**国立台湾大学との合同カンファレンスを開催** (農学生命科学研究科・農学部ほか)



プレナリーセッションには、両大学の教職員、学生の約250人が参加しました

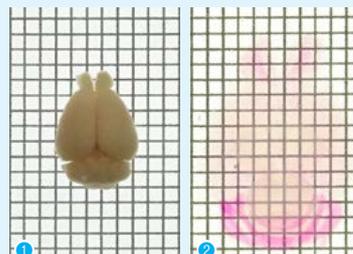
12月9日~10日、「Co-creating the Future Society in Asia」をテーマとしてUTokyo-NTU Joint Conference 2019を開催しました。本カンファレンスは、東京大学-国立台湾大学戦略的パートナーシップ大学プロジェクトの一環として2015年からほぼ毎年両大学で交互に開催しており、今回が4回目の開催となります。9日の午前中には、弥生講堂一条ホールにてプレナリーセッションを実施し、五神総長、白波瀬理事が国立台湾大学のChung-Ming

Kuan学長とともに冒頭の挨拶を行いました。その後、高橋伸一郎本学農学生命科学研究科教授が「One Earth Guardians Development Program」と題して、Horng-Huei Liou 国立台湾大学医学院教授が「An overview of establishing National Geriatric Medicine and Health Welfare Center」と題して基調講演をそれぞれ行った後、両大学の学生4名が交流プログラム等の参加経験について発表しました。9日の午後と10日には本学の様々な部局で合計20の平行セッションを開催し、カンファレンスは盛会のうちに終了しました。

**表紙について**

本誌には、新年1号目の表紙に干支の動物にまつわる画像を掲載する伝統があります(1978年1月発行の392号から)。吉例に則り、子年の今回は、医学系研究科・上田泰己教授らの共同研究グループが創出して2018年3月に発表したマウスの全脳アトラス(地図)から、水平面の三次元図を掲載しました。

新しい全脳膨潤・透明化手法「CUBIC-X」によってマウス脳の全細胞を詳細に観察することを可能にした点描画様のアトラスで、それぞれの色が脳領域を表します(右の画像①は膨潤透明化前、②は透明化と細胞核染色後のマウス脳。体積比で10倍程度の膨潤化と高い透明度を達成しています)。スーラの絵のような点描で描かれたマウス脳は、脳機能の細胞レベルでの理解へと人類を導く地図になると期待されています。





## ドイツの湿原に迷って

日本でヒトゲノム計画が始まったのは1991年。この年にドイツの湿原Spreewaldがユネスコ自然遺産に指定された。ベルリンの中心から南南西に100kmほどの場所だ。伝説によると、悪魔が二頭の巨大な雄牛を使って大地を引っ掻きまわし、網目のような水路がSpreewaldにできたという。ここが、このタイトルの現場となる。

2001年からフンボルト大学、ボストン大学、京都大学、医科学研究所は、バイオインフォマティクスの人材養成のために、持ち回りで夏に大学院生の発表を中心としたInternational Workshop on Bioinformatics and Systems Biologyを開催してきた。今も続いている。2008年はベルリンのフンボルト大学が担当で、ワークショップを帝京大学ベルリンキャンパスで開催した。

このワークショップには恒例の半日ツアーが中日にあり、この年はSpreewaldでのカヌー漕ぎとなった。貸切バスを仕立てての全員参加である。二人一組でカヌーに乗り自分たちで漕ぐ。現地に着くとライフジャケットが渡され、皆はサーッとカヌーに乗っていく。私も大学院生と一緒に漕ぎ出した。このカヌー漕ぎにどれくらい時間がかかるのか、

水路地図も渡されてなかった。いったい何時に出発点に戻ればよいのか。まあ、ドイツ人についていけばよいだろうと思った。甘かった。力と技能の差からか、あつという間に視界から全てのカヌーが消え去り、私達のカヌーは湿原の迷子になっていた。まわりには二頭の巨大な雄牛が引っ掻いてできた水路が迷路のように広がり、どう進めばよいのか全くわからない。同乗していた大学院生はすこしパニックになり、水辺から襲ってくる虫と格闘を始めた。私は研究の中でもこんなことがあったな、などと頭の片隅で考えていた。その後の記憶は定かではない。私は自分の野生で水路を漕いでいたと思う。1時間半ほど過ぎた頃、別のカヌーが見えた。近づいて尋ねると終点はその先だという。救われた。

2004年に終わったヒトゲノム計画がこの2時間ほどのカヌーツアーに重なった。地図がなければ迷う。地図と同様にビジョンがなければ若い人たちは立ちすくむ。妄想の中にビジョンが現れ、先へ進む者は進んでいった。

宮野悟  
(医科学研究所)

